



会報

札幌くらぶ

2022年 8月 第98号

編集・発行／札幌くらぶ 〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札幌事務局気付

ホームページ <http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/>

第33回札幌くらぶサロン

いいネ 福島さゆりさんのフルート

確か昨秋の札幌くらぶサロンのミニコンサートで、福島さんの演奏が予定されていたはずですが、中止となり残念に思っていました。今回それが実現されることになり、期待して豊平館に足を運びました。

曲は後半の2曲のみ。まず1曲目のモーツァルト。福島さんの音は清冽さとともに強さを感じさせる印象を受けました。2曲目のテレマンでは音の粒立ちの良さが目立ちました。

曲目の詳細は当日までわからなかったのですが、プログラムを見て5曲もやるんだあ〜とうれしくなりました。ただ、知っている

ピククリしたのは、3曲目のエマヌエル・バッハの無伴奏フルートソナタ。曲想は確かにロココ風ではありますが、Aモル（イ短調）の色調が強く曲の根幹を支えており、聞きながらこの曲の先にはモーツァルトというよりはベートーベンの音楽が見えて来ました。

いや、そう見える演奏を福島さんが行っていたのです。

福島さんは演奏前のコメントで、この曲は父（セバスティアン・バッハ）の神聖さを持った曲ではなく、もう少し人間味が表われた曲だと述べていました。その曲への共感がそのまま演奏に表われていて、初

始まりはモーツァルト ロンド 二長調



ピアノの小山雪絵さんと



めて聞く曲でしたが、鮮明に心に残る曲になりました。感謝！

4曲目のシリックスは、無伴奏のフルート曲を1曲あげると言われたら、まず真つ先にあげる曲ではないかしら。福島さんの演奏は柔らかいけれど芯のある音で全曲が統一されていて、ドビュッシー独特の幻想的な心象があふれたものでした。

特に最後の音がピアノシモで消え入るように終わった時には、あまりの美しさに、思わず心の中で小さくブラボーと叫んでしまいました。とってもステキな演奏でした。

最後は私の大好きな曲、フランス六人組の一人ブランクの

ソナタです。福島さんのコメントによれば、この曲は3年前の石狩市でのコンサートでも演目にあげていたとのこと。そのことが難曲にもかかわらず、堂々としていて技術的には余裕すら感じられるほどの完璧さを生み出して、心ゆくまでブランクの音楽を楽しむことができました。

全曲を聞き終えて感心したのは、最初と最後をピアノとのデュオの曲にして、3曲の無伴奏の曲を囲んだプログラムの配置の妙。曲間に福島さん自身も述べられたコメントの楽しさとの確さ。そして彼女の息継ぎ。吹奏楽器の特徴である息継ぎは、演奏上の限界要因ですが、音楽性を高める要因でもあります。彼女の息継ぎは非常に音楽的で、特にシリックスの演奏で見事に発揮されていました。ピアノの小山さんもしっかりとしたサポートでした。

こんなステキな演奏を聞かせてくれた福島さんが札幌の団員であることを、私は誇りに思います。これからも札幌での活躍を応援するとともに、個人的なコンサートを、できれば札幌くらぶサロンで再び開かれることを心から願ってやみません。福島さん、素晴らしい演奏、ありがとうございました！

追伸

忘れられない当日の2点。その1、八木先生の札幌アーカイブ。吉野直子二十歳、バリバリのモーツァルトの驚嘆すべき演奏。その2、上田会長の最後のあいさつ。メゾピアノ藤村実穂子さんのテレビでの発言の完璧な再現とそれに対する会長の心からの静かな決意。

会員／遠藤研司



10月5・11月 定期演奏会 名曲コンサート

演奏会を楽しく聴くために

八木 幸三 (札幌くらぶ 顧問)



マティアス・バーメルト

想的に幻想曲風な前半部からそのまま続いて「幸福な船路」の部に入り、管楽器で導入の部を経て第1主題が弦楽器で奏せられる。風が吹き船が出帆する第2主題が伸びやかに歌われ、「海の静けさ」の動機が速度を増しながらあらわれ、終結部ではファンファーレが鳴り船が歓喜に満ちて目的地の港に到着する。

■C・P・E・バッハ

チェロ協奏曲イ長調

大バッハの息子エマヌエル・バッハは、音楽様式がバロックから古典派へと急激に移り変わっていった変革期の音楽家である。彼は70曲あまりの協奏曲を残したが、その大部分がクラヴィアのための作品で、他の楽器は有名なオーボエ協奏曲をはじめ9曲ほどである。チェロ協奏曲は、このイ長調とイ短調作品の2曲が現存している。この曲は、繊細な旋律が有機的な移行をおこなない、計画的な和声的発展を生みだしている。



安井陽子



山下牧子



札幌合唱団



甲斐栄次郎



櫻田亮 ©Ribaltaluce

が鮮やかに表現され、「太鼓ミサ」とも呼ばれている。

■グリムカ

歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲

名曲コンサート
11月6日(日) 14:00
指揮 松本宗利音
ピアノ 松田華音

■バラキレフ

3つのロシア民謡の
主題による序曲

「ロシア5人組」の中心的存在だったバラキレフの初期作品の一つ。よく知られた3つのロシア民謡を主題として、グリーンカ作曲の『カマリンスカヤ』を手本としつつ、独自の手法でロシア民謡を交響的に処理しようと試みている。フルートで奏でられる第1主題は、民謡「白樺はなぜ頭を垂れなかつたか」から採られ、第2主題は、チャイコフスキーの交響曲第4番終楽章でも使われた婚礼の歌「白樺は野に立てり」による。第3主題は陽気な「ピーテル街道に沿って」で、この民謡も後にストラヴィンスキーが『ペトルーシユカ』の終幕で用いている。

『イワン・ササーニン』と『ルスランとリュドミラ』の2つのオペラしか残さなかったグリーンカだが、彼は「ロシア・オペラの父」という名声を戴き、ロシア芸術音楽の礎を築いた。イタリアに渡り、オペラを研究した後ベルリンで作曲を学び、ロシア語の台本による最初のオペラを書くことになる。その後、プーシキンの叙事詩的作品に基づく『ルスランとリュドミラ』がつかられるのだが、プーシキンが決断によって急逝したため、台本よりも作曲が先行してしまふ。難産の末生まれたこのオペラは、ロシアや周辺国の民謡が多く用いられ、序曲もロシア的要素がふんだんに取り入れられている、まさにロシア国民楽派の先駆けとなる傑作になった。

第648回定期演奏会
10月22日(土) 17:00
23日(日) 13:00
指揮 マティアス・バーメルト
チェロ 佐藤晴真
ソプラノ 安井陽子
メゾソプラノ 山下牧子
テノール 櫻田亮
バリトン 甲斐栄次郎
合唱 札幌合唱団

■メンデルスゾーン

序曲「静かな海と
楽しい航海」

ゲーテのふたつの詩「静かな海」と「楽しい航海」を題材に作曲されたこの曲は、静かに眠



佐藤晴真

©Tomoko Hidaki

音楽好きのニコラウス2世侯

爵に仕えていた晩年のハイドンは、侯爵から夫人のために1年に1曲ずつミサ曲を作曲するよう求められる。この曲はその2番目の作品で、当時オーストリア領であった北イタリア各地にナポレオン軍が激しい侵略を続け、愛国者ハイドンのフランスへの脅威に対する怒りの表明から、この題名が付けられた。第6曲目「アニヌス・デイ」では独奏ティンパニが用いられ、戦いへの恐怖と平和への強い願い



松本宗利音

■チャイコフスキー

ピアノ協奏曲

第1番

数あるピアノ協奏曲の中でも、これほどポピュラーな作品はグリーグやラフマニノフの第2番くらいだろう。



松田華音

©Avako Yamamoto

それほど万人に親しまれている曲なのだが、初演時には、当時の名ピアニスト、ニコライ・ルビンシュタインに酷評された。もともとチャイコフスキーは、ヴァイオリン協奏曲も初演時には演奏不可能と酷評されていて、批評だけで挫折することはなく、後に2度の大改訂をおこなない、ルビンシュタインも積極的にこの曲を演奏している。チャイコフスキーの甘美な旋律は、ベートーヴェンなどを好む辛党には敬遠されがちだが、ロマンチックな甘党にはたまらなく魅力的な一品。

■ムソルグスキー

「ホヴァーンシチナ」より

「モスクワ川の夜明け」

ムソルグスキーの遺作オペラ『ホヴァーンシチナ』は、作者自身の台本で書き進められたが、ロマノフ朝の皇帝を舞台の登場人物とすることは禁じられ

ていたため、中心人物であるピョートル1世を登場させることができず、筋はわかりにくいものになった。作曲も順調に進まず、作者存命中には完成しなかった。オペラのプロローグとなる「モスクワ川の夜明け」は、改革支持者たちが処刑された翌朝の様子を描いたものであるが、旋律は実に美しい。

■ボロディン

「イーゴリ公」から

「ダツタン人の踊り」

12世紀のキエフ公国分裂時代、イーゴリ公が南方の草原地帯に現れた遊牧民族ポロヴェツ人(ダツタン人)と戦う愛国物語をボロディンは未完のオペラとして残した。その後リムスキー・コルサコフとグラズノフが共同でまとめあげたのが現在の歌劇『イーゴリ公』だ。特に第2幕で演奏される「ダツタン人の踊り」は、ボロディンの作

品の中でも最も有名で、ポピュラー音楽として編曲され親しまれている。

■ハチャトゥリアン

「ガイヌ」より

「剣の舞」「子守歌」

バレエ音楽「ガイヌ」にある「剣の舞」は、誰もが一度は耳にしている名曲。この曲を作ったグルジア出身のアルメニア人作曲家ハチャトゥリアンは、劇音楽として「仮面舞踏会」を1941年に作曲した。その後、この劇音楽から作曲家自身が5曲を選び2管編成の管弦楽組曲として再編成している。

■チャイコフスキー

スラヴ行進曲

ロシアのウクライナ侵攻は、戦争の恐ろしさをあらためて現実のものとした。19世紀後半、セルヴィアとオスマン帝国との戦争でチャイコフスキーは親友のニコライ・ルビンシュタインから、この戦争の犠牲者たちの追悼演奏会のための作品を依頼される。劣勢だったセルヴィアに対しスラヴ民族としての同胞意識から、チャイコフスキーは「セルビア||ロシア行進曲」と題されたこの曲をわずか5日間

で作曲した。曲は3つのセルビア民謡のほか、帝政ロシア国歌『神よ、皇帝を護(まも)りたまえ』が引用され、そのため旧ソ連時代にはオリジナルでの演奏が禁止されていた。

第649回定期演奏会

11月26日(土) 17:00

27日(日) 13:00

指揮 エリアス・グランディ

ヴァイオリン ヴィクトリア・ムローヴァ

■シヨスタコーヴィチ

ヴァイオリン協奏曲第1番

その時の政治情勢により、自分の作品が自由に発表できない。そんな今では考えられないような事が半世紀前まであった。この作品は戦後間もなく作曲された。当時のソビエト音楽家会議の批判の矢面に立たされ

ていたシヨスタコーヴィチにとって、内省的な協奏曲は発表しづらかったことだろう。その後、名匠オISTRAフの独奏で、ニューヨーク・フィルがカーネギー・ホールで演奏し、空前の絶賛を博す。しかし、西側の歓迎ぶりと対照的に、ソビエト国内ではほとんど無視された。瞑想的でノクターン風の第1楽章、パッサカリアの第3楽章など、冷たく暗い響きが異様な高潔さを生んでいる。

■ワーグナー

「トリスタンとイゾルデ」

前奏曲と愛の死

ワーグナーの不倫癖は有名だが、この頃彼は裕福な商人のヴェーゼンドンク家に世話になり、こともあろうにその人妻マティルデと深い仲になっていた。彼女との出口のない恋の体験が、この楽劇に深く影響している。全曲には狂おしいばかり

の半音階的な和声に満ち溢れ、聴き手を官能の世界へと誘っていく。ここで駆使されているいわゆる「トリスタン和声」は、その後の無調音楽をはじめとする現代音楽の扉を開き、音楽史上の一大発明となった。

■ドビュッシー

「海」

この曲は、交響詩とも言われるが元々は3つの交響的エスキス(素描)と題され、作曲家自身、交響的習作ととらえていたようだ。しかし、この曲は優れたオーケストレーションにより色彩の冴える鮮やかなパレットから描き出された作曲家の代表的管弦楽作品。彼は、単純に海の光景を描いているものではなく、自然の中にひそむ運動性やエネルギーに着目して、それを海の動きに託したのだ。

(写真協力 札幌交響楽団)



©Felix Broede

エリアス・グランディ



©Benjamin Ealovega

ヴィクトリア・ムローヴァ

楽員さんに興味津津 ③1

つるの ひろゆき

ヴァイオリン奏者 鶴野絃之さんに聞く

「究極の美」は恐怖の一步先に存在する



©K.Seki

プロフィール

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、同大学音楽学部を経て、同大学大学院修士課程修了。これまでに玉井菜採、沼田園子、ジェラルド・プーレ、オレグ・クリサ、イゴール・ペトルシェフスキ、マウロ・イウラート、安永 徹、永峰高志の各氏に師事。2016年 及川音楽事務所 最優秀新人賞第1位受賞。埴日協会主催交流コンサート(ウィーン・コンツェルトハウス)にて演奏。2016年、2017年ミネソタ州 Northern Lights Music Festival(NLMF)奨学生。同音楽祭オープニングガラをはじめ各地でのソロコンサートに出演。藝大フィルハーモニア、NLMF オーケストラ、札幌交響楽団とコンチェルトを共演。紀尾井ホール室内管弦楽団(旧称: 紀尾井シンフォニエッタ東京)の2017年度シーズンメンバー。日本フォーレ協会会員。洗足学園音楽大学非常勤教員、SG New Philharmonic Orchestra コンサートマスター。2020年に札幌交響楽団に入団。

4歳からピアノとヴァイオリンを始めました。フォーレをはじめメシアンなどのフランス音楽は自分の原点だと思っています。ドイツ音楽では例えばリヒャルト・シュトラウスの音楽は大好きです。彼は絢爛豪華でロマンチックな、希望に満ち溢れた作品をたくさん残しました。

技巧的にもオーケストレーションも一つの頂点を築いたといっても過言ではなく、弾き甲斐があります。

総合芸術もとても好きで、公演の度に心が躍ります。特にバレエが大好きです。スクリヤーピンには、オルガンを含めた管弦楽のみならず、光、色、そして香りでもホール全体を包むという壮大な計画があったようなのですが、その話を聴いた時になんて素敵な構想なのだろうと感じました。いつかそういうコンサートを札幌でもしてみたいです。

でも、間奏で木管とヴァイオリンが掛け合いをしているパッセージなどのほうがお気に入りです。度々繰り返して聴いていました。様々な音色が重なり合い、コミュニケーションを取るのを楽しんでいます。

話は脱線しますが、オーケストラで演奏中、2ndヴァイオリンから木管楽器は完全に背後になるのを見えないのですが、札幌の方々のような音楽的上手なプレイヤーの演奏だと、音が出るほんの直前に、次の演奏が眼前に見えるのです。これは本当に不思議な感覚です。

数年前、大阪国際コン入賞の副賞としてアメリカ・ミネソタの音楽祭へ2回招待していただいたことがあります。オーケストラのコンサートにおいてガブリエル・ヘイネ氏とブッチーニの歌劇「蝶々夫人」を演奏した時のこと。音楽祭はミネソタの北部ヒビングという街を中心に関われました。現地はもちろん、講師を含め日本人が2人しかおらず、そのうち一人は後期のみ参加者だったので、生まれて初めて、日本から離れた

のです。日々の中で日本を感じられるものといえば、唯一、教室にあった東芝のコピー機だけ。そんな中、3週間ほど過ごし、後期に「蝶々夫人」の舞台リハーサルが始まった時、生まれて初めて、日本に強い懐かしさを感じました。日本の空や陽射し、対流する空気そして色彩を思い出し、リハ中に涙を堪えるのでいっぱいでした。あれほど日本という祖国が遠く感じたのは後にも先にもありません。現地では私は有り難いことにとっても温かく歓迎して頂けたのですが、それでさえも、文化や価値観の違いを全身で感じつつの生活は、重圧と孤独感との闘いといえるものでした。



5歳の頃



アメリカミネソタ州にて
ゲネプロ中の写真



自身の楽器を撮影

洋画を字幕で観ます。教えたことはありませんが、年間数百本は観ていると思います。メタ要素やメッセ

ージ性の強い映画を好んで観ます。また、ホラーファンタジー、SF要素のあるゴシックホラーなど、映像や見せ方が美しくかつ斬新なプロットの映画も好きなので、観るのはここ20年以内の制作がほとんどです。マイナーな良作を発掘するのも楽しみです(笑)。映画も総合芸術の一つだと思います。

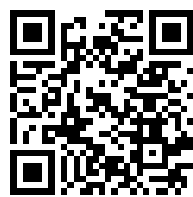
最後に、私が生涯大切にしてきた美という概念について少しだけ触れます。美しいだけが芸術ではないとよくいわれますが、人に美を感じ取る感性が備わっているからこそ芸術は存在します。醜悪やカオスが終着点では決してありません。人は本能的に美を追います。演奏をしていていつも思うのですが、進化や発展というのは安全圏にいては決してなし得ないし、いくら計画的に練習しようと確証のない恐怖の

私はいつも、演奏がお客さまがご自身の心と対話するきっかけになってほしいと考えています。



札響くらぶホームページ

詳細は「札響くらぶ」ホームページの入会案内をご覧ください。



札響くらぶ入会申込フォーム

バレエのお話

神奈川の洗足音楽大学附属のオーケストラでコンサートマスター(公演によっては2ndのトップ)をされていました。この音大はバレエコースがある珍しい大学で、ピットでバレエ音楽を演奏する機会にも恵まれました。東京文化会館でアレクセイ・パクラン氏の下でラ・バヤデールのソロを演奏した時には、古風にも立奏を求められました。心に残る公演の一つです。3日間で6回演奏しました。

バレエが好きである理由の一つに、和声やフレージングが踊りと一体になるという事が挙げられます。和声やオーケストレーションに形のような感触が感じられるのですが、それを振り

という形で視覚化されるのです。私にとって日常生活というのは平べったい色や騒音などストレス源が非常に多く辛いものですが、そんな中、観て、形を感じられる時が、1日で最も安堵できる時です。

《趣味について》

日常のどんなことでも全てを演奏に昇華することはまず第一に興味と言えます。

あとは、仕事道具に拘ること。体の一部といえる楽器は一ヶ月ごとに東京の楽器職人へメンテナンスをお願いしています。職人さんとはかれこれ10年以上のお付き合いです。また楽器ケースやスツケースのブランド選びや手入れも大切にしています。あとは家の片付け。ソロでもオケでも、本番後2〜3日はいつも放心状態なので、休憩と練習に集中できる環境は大切です。

また、写真撮影が好きです。小学校3年生から続けています。藝大では宣材写真撮影のアルバイト(?)もしていました。パソコンで編集(レタッチ)する派としない派に分かれるようですが、私はかなりレタッチするほうです。レタッチすることを前提に露光やアングルを調節します。結局はイメージションの具現化、表現なのだからこれで良いと考えています。「無加工の写真」も「見たままの風景



深夜の丸の内。

R. マグリットの絵画から着想

は、無加工であると主張する人自身による(無加工であるという)イメージションが、すでに投影されています。

《美について》

真善美のうち最も価値の高いのは「美」である

最後に、私が生涯大切にしてきた美という概念について少しだけ触れます。

美しいだけが芸術ではないとよくいわれますが、人に美を感じ取る感性が備わっているからこそ芸術は存在します。醜悪やカオスが終着点では決してありません。人は本能的に美を追います。演奏をしていていつも思うのですが、進化や発展というのは安全圏にいては決してなし得ないし、いくら計画的に練習しようと確証のない恐怖の

先に決死の覚悟で新しいことをしようとしなれない音楽は生まれません。どの演奏レベルであろうと、どの次元であろうと、本質的には同じことです。恐怖の一步先に、究極の美が存在します。その美の実態を何と呼ぶべきなのかは分からないけれどそれは確かに存在します。

音波によって美しい幾何学模様が現れるクラドニの図形、素数が模様を描くウラムの螺旋など、美は数学、すなわち自然界の法則と繋がりがあらし、逆に言えば美は私たちの周りに溢れているとも言えます。規則性「のみ」が美ではありません。

私にとって新天地である札幌ですが、生徒は少しずつ増えており、「後進の指導」にも前向きでいるつもりです(指導という言葉は嫌い、あくまでも音楽の先輩としてアドヴァイスし、生徒さんと共に成長したいです)。

会員・スタッフ募集

私たち「札響くらぶ」は、1996年8月に設立され、25年が過ぎました。札幌交響楽団が紡ぎだす音楽が、より多くの人々を魅了し、楽団と市民が大きな輪になっていくことを目的に活動しています。

この目的に向かって、「札響くらぶ」に入会し、私たちと一緒に活動・運営していただける方を募集しています。

札幌コンサートマスター

田島高宏さんと共演して

札幌フィルハーモニー管弦楽団(札幌フィル)は、2022年5月21日の第64回定期演奏会で、札幌コンマスの田島高宏さんとチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲を共演しました(指揮・松井慶太氏。他にスラヴ行進曲、交響曲第6番「悲愴」のオールチャイコフスキープログラム)。

札幌フィルは、1970年に設立された札幌初の市民オーケストラです。現在団員は社会人を中心に、中学生から70代と幅広い年代の約70名です。毎年春と秋2回の定期演奏会と、ファミリーコンサートを1回開催しています。

田島さんとの共演は、長年札幌フィルの弦楽器トレーナーをお願いしております。元札幌1stヴァイオリン奏者の横井慎吾先生(2017年12月札幌退団)から、「たじ」のソロでコンチェルトをやってみようか、との提案があったことがきっかけで企画されました。

この演奏会は当初2020年春に行われる予定でしたが、コロナの影響で中止になってしまいました。しかし、指揮者、ソ

リスト、曲目とも全く同じ内容の演奏会をやりたいという団員の希望が多く、再度田島さんに依頼して快諾していただき、ようやく実現しました。

田島さんとは3回練習をしました。たいへん人当たりが柔らかく、控えめな物腰の方ですが、オケの演奏に対しては忌憚のない意見を言うていただきました(でもおつしやりながら、「すみません、すみません」と謝り続けるのです)。ご自分があんなにたいへんなソロを弾きながらも、例えばクラリネットの何小節目の音がどうだ、といったようなご指摘をされ、その態度の鋭さに驚かされました。

また、ヴァイオリンパートの弾き方を実演を交えて教えてくださいました。札幌のコンマスが目の前で弾きながら、ここはこういう弓の使い方、こういう表現でと教えてくださるので、またとない貴重な体験でした。

田島さんはチャイコのコンチェルトのソロを弾くのは初めてだったそうで、呼んでいた嬉し、2年の時を経て実現したのでは非みんないい演奏にしようと言ってくださいました。本番では田島さんのソロは練習のときより一段と素晴らしい成果を発揮できたのではないかと思います。アンコールでモーツァルト「アヴェ・ヴェルム・

コルプス」を演奏したときは目頭が熱くなりました。

札幌フィルは、札幌パソネルマネージャーの高井明先生にも演奏会の指揮や、管楽器の指導でお世話になっております。私たちアマチュアオーケストラ奏者にとつて、プロの音楽家から受ける刺激はたいへん貴重なもので、ひとりひとりの音楽や楽器演奏に対する意識の変化、気づきをもたらし、独りよがりになることを防いでくれます。今後も札幌のみなさまに共演、ご指導をいただければ幸いです。

札幌フィルハーモニー

管弦楽団

コンサートミストレス

(札幌くらぶ会員) 高木和恵

会田莉凡という稀有な音楽家を迎えて

いやはや、すごい演奏を聴いてしまったな…。

アンコールのバッハのラルゴの余韻に浸りながらじわじわと込み上げる思いだった。

2022年8月4日札幌

Primo シリーズ定期演奏会での、コンサートマスター就任記念公演とも言えるソリスト会田莉凡さんを迎えてのドヴォルザ

引き付けて止まない芯の通った澄んだ歌声が非常に美しい。

ドヴォルザーク特有の土俗的な旋律の歌い方や、正確無比なボウイングからのスラブ的風味も存分に溢えながら時には激情的に力強く、頻繁に出現する重音奏法も正確かつ技巧的で全てが実に優美である。多彩な音色の変化で聴衆を魅了し、全く飽きさせることなく聴かせる技量は圧巻と言う他ない。第3楽章での躍動感とオケと共にヒートアップして行く熱量の融合は明らかに聴衆をも巻き込んでいた。終演後の大きな拍手とカーテンコールの長さがそれを物語っていた。管の押出しの強弱やソリストとの音のバランスに細心の注意を払っていた下野竜也マエストロの楽想とそれに応えた札幌もまた見事であった。何よりも会田さん自身がオケと共に心ゆくまで音楽を楽しんで演奏している様子が印象的だったのと輝くりボンのアクセサリーがデザインされた鮮やかなコバルトブルーのドレスが実によく似合っていた。

思えば昨年10月会田さんが2022年度シーズンより札幌コンサートマスターに正式就任という一報を聞いた当時は、やっとなんか！という万感の思いに至った事を思い出す。

以前は毎回変わるゲストコンサートマスターの客演を楽しみにしていた反面、田島高宏現コンサートマスターと共にいつものトップの席でオケを牽引するのは誰なのか？そしてその姿を早く見てみたい、という相反する複雑な想いで演奏を聴く日々が続いたものだ。

しかしながら会田さんと言えば現在京都市交響楽団特別客演コンサートマスターに就任中で、更には10数年来参加なさっているサイトウキネンオーケストラにクアルテット奥志賀と、八面六臂を超えたご活躍ぶりである。よくお引き受け頂けたな、というのが正直なところでこれはもう感謝しかない。会田さんをコンサートマスターに迎えることにより、オケとしての音楽的資質の向上に繋がるのは間違いなくこれからの札幌が益々楽しみです。

最後に、首席指揮者マテイアス・バームルトが公演直前で来日不可能となる事案発生後、僅か数日前の代役依頼を快諾頂いた下野竜也マエストロと本公演をギリギリ開催までこぎ着けた事務局の努力に深く感謝申し上げます。

会員/吉川宗男



(写真協力 札幌フィル)

「ちえりあクラシック講座」に参加して

そろそろ自粛に疲れて来た。六十の手習いはすでに始めていたが、そろそろよい招待状が宮の沢のちえりあから舞い込んで来た。さつぽろ市民カレッジ2022春新発見！オーケストラの表と裏く明日からの演奏会が楽しくなる〜である。しかし、すんなりとは入講できず、抽選があった。確かにコスパなのである。4回で3600円であった。どうにか当選し(約50名らしい)第1回目の講座に臨んだ。だが前日に、ちえりあから電話があり第1回目は延期となった。(最後の日程に変更)

4回ある講座は別表のとおりである。実際の1回目は6月6日、元札幌オーボエ首席の岩崎弘昌さん。「奏楽」のピアノスト前田朋子さんと共にバスハから松山千春まで9曲、間にオーケストラでのオーボエの役割とその重要性について、またオーボエのリードづくりについても説明があった。終演後、舞台の上のリードを作る器具も見て触らせてくれた。そのオーボエも実際に持つ事ができた。

2回目は札幌事務局の中川広一さん。札幌の歴史と活動・組織

と業務・企画制作・裏方のスタッフ・楽員さんと演奏家についてスライドと貴重な動画と共に、聞く事ができた。

3回目は「オーケストラの取りまとめ、コンサートマスターのすべて」で、田島高宏さんのお話とヴァイオリン演奏。主にコンマスの仕事というより札幌とドイツ時代の田島さんの「すべて」をスライドと共に語った。貴重な写真がいっぱいあった。演奏はいつも聴いているが、お話をたくさん聞いたのが新鮮だった。そして思い出を語る演奏。優しい穏やかな人柄が垣間見える講演と演奏だった。

第1講 5月30日(月)	小さなオーケストラ クラシックギターのすべて 〜ギター演奏を交えて〜	札幌市立大学 名誉教授 中原 宏
第2講 6月6日(月)	オーケストラの花形 オーボエのすべて 〜オーボエ演奏を交えて〜	NPO 法人 奏楽(そら) 理事長 岩崎 弘昌 <small>(ピアノ伴奏 前田智子)</small>
第3講 6月20日(月)	オーケストラ運営のななめ オーケストラ裏方のすべて	札幌交響楽団 総務営業部 次長 中川 広一
第4講 6月27日(月)	オーケストラの取りまとめ コンサートマスターのすべて 〜ヴァイオリン演奏を交えて〜	札幌交響楽団 コンサートマスター 田島 高宏 <small>(ピアノ伴奏 田島ゆみ)</small>

最終回に日程変更された「小さなオーケストラ、クラシックギターのすべて」は札幌市立大

三大テノール ドミンゴと 世界のプリマドンナ ゲオルギュー

6月16日に上野の東京文化会館で開催されたブラシド・ドミンゴとアンジェラ・ゲオルギューのコンサートに思いきって行って来ました。

指揮者はフランチェスコ・イヴァン・チャンバ、オケは新日本フィルハーモニーで、若手ソプラノのモリナ・マンゾも、三大テノールはパバロッチイ

(イタリア)、カレラス、ドミンゴ(二人はスペイン出身、お恥ずかしいが知らなかった)ですが、パバロッチイは72歳で亡くなりカレラスは今75歳で、ドミンゴは81歳。カレラスはキララで聞いたのでドミンゴを生で聞けるのはこの先ないかもしれないと。81歳とは思えない声量と艶のある声にびっくり。

ドミンゴはテノールで有名ですが、調べると若い時バリトンでデビューして、その後テノールに変更したようです。それで今の艶のある声なのかな？私は今のバリトンの声が好きだなあ。なんと言うか、ステージの雰囲気がとてもいいのも、やはり長年培われたものだと思います。

アンジェラ・ゲオルギューは50代のソプラノのプリマドンナ。初めて聞いたのですが、とても良い声だった。あの外国人

学の名誉教授中原宏さん。楽器の音楽変遷・奏法・巨匠といった夫々の秘密を、資料をもとに解き明かして頂いた。謎解きの間に本人の演奏もあった。

自肅前、道新文化教室で「100倍楽しむクラシック」を受講した。道新講座は札幌くらぶ会報でお馴染みの八木先生の拡大版みたくである。今でも毎月1回開催されている。またNHKの文化教室でも「クラシック音楽」の講座がある。今回のちえりあ講座は、開催が4回で手軽だった。ちえりあ発の新鮮な視点からオーケストラを解き明かす事ができた。

会員/塚田 総

たまには「二度聴き」も

5月の札幌「定期」。つい「二度聴き」をしてしまった。前日に聴いた「水上の音楽」のトランペットとホルンが耳から離れなかったのである。

トランペットが呼びかけ、ホルンがそれに応える。「序曲」と「アラ・ホーンパイプ」に顕著だったが、全曲を通してこの二つの楽器の「打てば響く」ような掛け合いは続いていた。こんな愉悅に満ちた音楽があるだろうか。パーメルトさんの棒も「どうぞ自由に」と言わんばかりの動きで、要所だけを締めるものであった。

K595もすばらしかった。



外に出ると暑さも和らぎ、歌の余韻に満たされた初夏の一夜でした。生演奏ってなんて素敵なんでしょう！可能ならこのメンバーでキララに来て欲しい。もちろんオケは札幌交響楽団で。

追伸 30代のモンゾは若手の伸び盛り、マエストロはオペラの指揮者として引退りだこです。

会員/神 秀夫

僕の愛聴盤②

憂いにふるえるモーツァルト
ダンディなシヨパン

○ピアノ協奏曲第23番イ長調
K488(モーツァルト) ダ
ニエル・バレンボイムのピア
ノと指揮/イギリス室内管弦
楽団 (67年録音)

この地球上で最も哀しい装いに包まれた音楽をニュアンス豊かにつむぎだした怪演である

う。特に第2楽章アダージョでの表情が傑出。哀しみ、涙、慰め、微笑みといったモーツァルトの音楽のエッセンスが交錯、明滅する。転調の妙味を知り尽くした木管楽器と独奏ピアノの絶妙のバランスが美しさに彩りを添えている。独奏ピアノの消え入るようなピアノニッシモが聴く者の心を深く引きつける。

僕の大好きな日本画家の東山魁夷氏もこよなく愛した至高の音楽。それを瑞々しい感性で再現した若き日のバレンボイム、その才能を称えよう。文豪スタンダールが唱えた、「モーツァルトの哀しみ」とはこのようなたずまいを言うのだろうか。
忘れもしない東日本大震災数日後のNHK朝のニュース、バレンボイムとウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が、犠牲と

なった人々への追悼をこめてこのアダージョ楽章を奏でる光景が映し出されていた。その切々とした調べは耳を傾けている者に形容の言葉を失わせた。バレンボイムの面目躍如、即座にこのディスクの存在が頭をよぎった。

○夜想曲全21曲(シヨパン)
アレクシス・ワイセンベルク
のピアノ
(67年、69年録音)

そんな彼が、デビュー時の勢いを維持したまま、夜想曲全曲を世に送り出した。ここでも、それまでのノクターン像とはひと

ワイセンベルクのデビュー盤は衝撃的だった。豪快なテクニクとかわいた音色で鳴り響かせたピアノ協奏曲第一番は(スクロヴァチエフスキー指揮/パリ音楽院管弦楽団)、夢見るような眼差しで少女に語りかけるといった、それまでのシヨパン像を完全に覆してしまった。シヨパンがこんなにダンディに弾かれるとは、僕にとってはひとつのカルチャー・ショックであった。

そんな彼が、デビュー時の勢いを維持したまま、夜想曲全曲を世に送り出した。ここでも、それまでのノクターン像とはひととあじもふたあじも異なる、新

しい時代のピアノリズムが披露された。曖昧さのひとかけらもない、輪郭の明快な音の数々はそれだからといって無味乾燥な音符の羅列ではなく、実にクールなりリズムを周りに漂わせていた。あるウイスキー会社のテレビ・コマーシャルでも用いられた第5番嬰へ長調作品15-2は、特にダンディズムあふれる仕上がりとなっている。

アラウ、フランソワ、アシュケナージ、ピリス、ポリリーなど名盤がひしめく夜想曲であるが、僕にとってはワイセンベルクが独壇場の輝きを放っている。

早速口に入れる。ふわりとした口どけの「白鳥の湖」という名のソフトクッキーなので、パレエの場面を想像しながら食べよう。紅茶にしようか、コーヒーにしようか、迷いながら…
雨の日曜日、NHKFMで札幌定期第645回を聴いていると、2年以上コンサートに行っていないなあ、と寂しくなった。

コロナのせいで中止が続いてやっとならば定期演奏会があるのに、自分の病気のせいでもだゆっくりコンサートに行ける状態でないのが歯がゆい。久しぶりに札幌の演奏を聴いていると、やっぱりKittagで聴きたい、何とか体調を整えて来年は定期会員に復活しよう。明日から散歩や運動をして体力回復に励もうと心をあらたにした。

スタッフの声

▼春は忙しい。毎週末、山菜採りに追われている。ふきのとうから始まり、あずき菜、ネギ、独活。今週末は中山小屋に一泊で竹の子採り。電気もない、携帯も繋がらないこの小屋で仲間のバイオリンの演奏会をしたことがある。川のせせらぎと星の降る音、見事なアンサンブルであった。忘れられない夜もある。(尾形)

▼札幌くらぶの会員は札幌在住の方がほとんどを占めているが、遠くは釧路や函館にお住まいの方もいてその深い札幌愛に頭が下がる。札幌のコンサートはどのくらい聴けているのだろうか、札幌くらぶに何か望むことはないだろうか、一度聞いてみたい気がする。(み)

▼ベルリンフィルをハンブルク港に新設されたエルベフィル大ホールで聴いて2年半、今年6月末NHK TVでラトビアでの演奏に出会えて感激。首席指揮者になり3年のキリル・ペトレンコ(ロシア)出との呼吸はなめらかに合い一段と素敵なコンサートになり嬉しくなりました。(美保)

随想 本棚の隅から 26

コロナ自粛もだいぶ緩くなった五月の半ばに、しばらく会っていなかった高校時代の友人達とランチをした。

あの頃は一クラスに六十人も生徒がいたのに、女子は十人しか居なかったのだ、卒業後も何かあるとみんなで仲良く集まっていた。それが今では元気で出歩けるのが三人だけになってしまった。我が家で思う存分おしゃべりをした。三密回避もマス

クも忘れて…
郊外に住んでいる友人が庭のライラックを大きな花束にして持ってきてくれた。五弁のライラックは幸運を呼ぶという説がある。さがしてみたら、なんと五弁の花が二輪も見つかった。先の短い私たちにこれからどんな幸運が訪れるっていうの…? でもなんとなく心がふわりと暖かくなった。

そんなある日、長野にいる甥

からお菓子が届いた。誕生日でもクリスマスでもないのに何だろう? 詰め合わせの中にきれいな絵が描かれた缶が入っていた。甥からのメールに『人気のお菓子で入荷を待ってやっとならばお菓子から「叔母の日」にしよう。送る楽しみ」ってのがあった。「これがいいかな、あつちの方がおいしいかな」とあれこれ迷うのも楽しいのです』とあった。私はヴァレンタインデーになにか変わったチョコを探して贈るのを楽しんでいたので、同じことを感じているのが可笑しかった。

会員/井上明子